
転生して目指すはサポート役

星皇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生して目指すはサポート役

【Nコード】

N3887BA

【作者名】

星皇

【あらすじ】

神にその能力を欲っしられ友人とともに殺された。

目の前に現れたのは最高神。

もらった力で目指せ脇役。

オリ主を目指す友人を助けるぜ。

友人たち以外にも転生者を出すつもりでいますが、あくまでもつもりです。

第0話（前書き）

毎日更新目指しますが、なにぶん作者は学生です。

ご了承ください。ありがとうございます。

感想など返せないかもしれませんが、なるべく返していこうと思います。

つたない文ですがどうぞよろしくお願いいたします。

第0話

気が付いたらあたり一面が白い世界だった。

・・・ん？二次小説のような始まり方だな。

確か俺は仲間とキャンプで・・・・・・・・・・
馬鹿みたいに騒いで寝たはずだ。

「・・・・・・・・これ夢か」

「いや残念ながら夢ではない」

「!？ 誰だ!」

目の前にはかなり筋肉質の男がいた。

髪は白、きれいな白、なににも染まらない色だ。

「わしは神 ■ ■ ■ ■ ■ だ」

「? (なんだ聞き取れなかったぞ)」

「おお、すまん。ヌシらのような者たちでは理解できぬ言葉じゃったか。

そうじゃなヌシらの世界の言葉であらわすと『ゼウス』『オーデイン』と言ったところかの。」

「神様なんですか? これは夢じゃないんですよね」

「意外と順応が早い。死ぬ直前を思い出したか？」

「それはまだわからない」

「ほう。ならなぜそう思う」

「俺の直感がよく当たるんです」

「さすがじゃな。それはなはるか昔にヌシの先祖にわが眷属が暇つぶしに与えたものじゃ

ざっと500年前かのう。まあいつかヌシのような者に発現するよにしてあったものじゃが」

そっか神がこの直感を本物というならそうなんだろう。

そして直感俺に告げてる。

この神は本物だと。

「話がそれたな。本題に入ろう、ヌシらの死因は我々にある」

「どういことだ？ 二次小説だと結構『普通に死んだが抽選で・・・』とか『お前は異端だったから』

『本来死ぬはずの人間を助けてしまったから』とかもあるだろ」

「いや、それ以外にもわしらと同じ理由もあったはずじゃろ」

この神は意外と人間の生活を

「のぞいておるよ」

！？心をよまれた。 まあ神だから仕方ないか。

「神じゃからな。まあそれでの一部の神がわし等上位の神に反乱したのじゃ。」

それでヌシの直感を手に入れるためにヌシ等を殺し手に入れようとしたのじゃが、

ヌシ等を殺したあとすぐわし等に見つかつてのう、すぐに鎮圧したというわけじゃ」

「そうなのか。ん？ヌシ等？」

「そうじゃあやつ等はヌシのキャンプの日に決行した。」

ヌシの友人を巻き込んだのう」

・・・俺を殺すためにみんな・・・殺したのか？

「・・・俺のせいでみんなは殺されたのか？」

「ヌシのせいではあるまい。責任は神にある」

「でも、夢のある奴だっていた。それなのに俺のせいで叶えられないんだろ」

涙がこぼれてきた。畜生、畜生。

「畜生が！」

「そう、自分を責めるでない。アフターサービスをしっかりするか
ら安心せい」

「アフターサービス？」

「そうじゃ転生させてやる」

転生？あれか？二次元の世界にとかのあれか？だめじゃないのか？

「そう気にするな。わしは最高神じゃぞ。なんでもできるぞ。安心せい」

「本当にいいのか？」

「ああ、と言っても転生する世界は限りなくその物語の世界に近い世界じゃ」

そうかならあらなるべく争いのなさそうな世界がいいかな。

「ちょっと待て。ヌシ一人で決めることもなからう。ヌシと一緒にここに来た者たちと決めるがよい」

神は指を鳴らした。

「あれ、ここどこ？」

「俺は確かキャンプしてたよな」

「ううん。もう食べられないよ」

「そろったかのう」

現れたそいつらは一緒にキャンプしていた幼馴染だった。

「あ、『蓮』ここどこ？ 私たち自分たちの寢床で寝てたはずだよね？」

「『葵』ここはなんというか」

「いや、蓮。俺には分かったぞここは天国であって天国ではない世界だな？」

そして俺たちは神によって間違って殺され、転生させられるんだろ？」

驚いたさすが『幸也』ヲタクオブザヲタクとよばれてなかったな。神様啞然としてるぞ。

「ヌシの友人はすごいう。神以外にも心が読めようとは」

神様違うんです。こいつ転生ものの二次小説大好きなだけなんです。

「ううん。あれ、蓮君。もう朝なのかな？ すごく眩しいね」

「『優奈』実はな」

みんなに説明する。幸也がなんか説明終わると震えだした。

「転生きたああああ！！ なんだどこの世界に行くんだ？ 特典はいくつつけられる？」

俺はオリ主になるぞお！！！！」

・・・こいつ馬鹿だったな。

「そっか死んじやっただね？」

「・・・葵」

「家族に謝りたかったな」

葵は大家族の三女だったかあの家族とももう会えないんだもんな。

「お父さんもお母さんもきつと悲しんでるよね。」「ごめん。」ううん。蓮のせいじゃないよ

蓮の直感に助けてもらったことだって何回もあったんだから」

葵の言葉にまた泣きそうになる。

「やさしいね葵」

優奈はそう言って葵を撫でている。

「優奈はいいのか？」

「大丈夫家族とは仲悪かったから。仲直りできないのはちょっとこころのこりだけどね」

『パンパン』手が鳴った。

「さて互いの現状が分かったところで、まず転生先を決めようかう」

神が本題に入った。

はいはい、と幸也が手を挙げる。

「リリカルなのはの世界にしようぜ」

リリカルなのは？確か小学三年生だったか四年生だったかの少女が魔法少女になるって話だよな。

「その世界は安全なのか？」

俺が気にしているのは安全性の三文字

戦争に駆り出されるのはごめんだからな平和に過ごしたい。

「いやな、裏の世界に手を出さなければ結構大丈夫な世界だぜ」

魔法は裏の世界が基本なんじゃないのか？

Fateとかそうだったはずだろ。よく知らんが。

「別にいいんじゃない？あたしあのアニメ見たことあるけど。幸也の言った通り

裏に手を出さなければかなり安全だったはずだよ。うろ覚えだけど」

葵見たことあるのか。アニメは小学校四年生ぐらいまでしか見てなかったな。

ずっと小説とマンガ読んでたし。どっちかというと原作はだった。

「二人がそういうなら俺は別にいいんだが、優奈はいいのか？」

優奈はアニメとか見ないからこの手の会話にはついてこれなさそうだけど。

「うん。わたしはアニメとか見たことないし。二人に任せるよ」

「ならりりカルなのはの世界だ」

どうでもいいが幸也。テンション高すぎだろ。

そんなに転生がうれしいか。家族はってあいつ一人暮らしだったな。親父とケンカして家出だっけ？

「そうか、では俗にいう『特典』を決めようかのう」

「俺は身体能力が真祖の吸血鬼並みで魔力値がSSSで『王の財宝』。中には宝具全種で投影魔術もつけてくれ」

おいかなり強くないか。

「他にはないのか？」

神様まだあげるのか。これ以上なにをあげるんだ？

「こんなもんで別にいいだろ欲張りすぎな気もするし」

やめたか。幸也にしては意外と謙虚だな。裏があるのか？
そう思った俺は別に悪くないだろう。きっと

「あたしが次言っている？」

「葵君かいぞ」

葵は何を言うんだ？戦うのか守るのか。

「あたしは結界と長距離転移を可能にして欲しい。それ以外は別に
いらないよ。」

強すぎる力を持つと不幸になるかもしれないから」

なんかマンガっぽいこと言ったぞ。

「私は回復に特化した能力が欲しいです」

優奈は回復か医者になりたいって言ってたもんな。

「欲がないのう。一人を除いて。さてヌシはどうするのじゃ？」

俺の番か。さてどうしたものかな。

「そのリリカルなのはの世界には戦闘があるんだよな？」

「そうだぜ。非殺傷設定魔法とか使ったりするけどな」

非殺傷？魔法を殺さないようにするのか便利だな。

「ふむ、なら俺の部屋にあるライトノベルやマンガの知識をすべてくれ」

「いいのか？戦闘向きではないぞ？」

「戦闘系は全部幸也」（馬鹿）に任せるからな。バックアップだな」

「蓮、今バカって言ったよな」

馬鹿が何か言っているが別にいいだろう。

「オリ主目指すんだろ下手に俺がいたらお前の夢が潰えるかもしれ

ないだろ」

幸也ははっとした顔で

「すまん蓮さすが知将だな。そこまで考えていたなんて」

（相変わらず蓮は幸也の扱いがうまいよね）

（そうだね幸也は結局蓮の手の平で踊ってるのにね）

あ、そうだ。

「俺たちの生活はどうなるんだ？」

「ヌシ等の生活はもう決めてある安心せい。少しぐらい不自由でも構わんじゃろ」

そっかこいつらと離ればなれは嫌だしな。

「原作ブレイクしてもいいのか？」

幸也は本当にオリ主になるつもりか。

「ああ、さっきも言ったが原作に限りなく近い世界の一つじゃからな。

世界の修正力なんてものは働きはせんよ」

よしよし、と息巻いてやがる。

「さて、質問は終わりかのう。なら頑張ってくるのじゃぞ」

俺たちの後ろに扉が現れる。

「ヌシ等の人生に幸あれ」

「行くか」

みんなにそういうと返事が返ってくる

「おう」

「「うん」」

俺たちは光に包まれた。

第0話（後書き）

一応他の転生者を出すつもりではありますが、あくまでつもりです。
やっぱり銀髪オッドアイとか見てみたいですよね。

第1話 く状況確認と能力を使うためにくその1（前書き）

今回は前回と違って短めです。

第1話 〱状況確認と能力を使うために〱その1

〱 蓮 side 〱

眩しい光を浴びて目を開けるとそこは子供部屋だった。
ぬいぐるみがいくつもある。少なくとも自分の部屋にはなかったはずだ。

「ここはどこだ？」

（蓮よ聞こえておるか？）

神様の声が頭に響く。

「神様か？ここはどこだ？」

（ヌシ等の今の情報を教えておこうかと思っただのう。）

「助かr・・・ん？声高くないか？」

（ヌシは現在肉体年齢が4歳ほどじゃからのう。原作は5年後じゃ。それまでに能力を使いこなすといいじゃろう）

「そうか。でここはどこだ？」

（おおっと。そうじゃったな。ヌシ等は孤児院に入っておることに
なっておる。

それまでの記憶を脳に焼き付けておこうかのう）

「っ痛」

頭に割れるような痛みが走った。
正直二度と味わいたくない。

（ヌシのだけ記憶を入れるのを忘れとった。他のものは寝ている間にいれておいたぞ）

神様！めっちゃくちゃ痛かったぞ。

（ヌシの能力はそれだけだと原作が始まるまで使えんからのう。これを使うとよい）

目の前に銀色の球体が落ちてきた。

「なんだこれは？」

（その中に必要なものが入っておる。時間の流れが違うからのう。じゃが老化はせんようにしてある。）

あれか・・・ご都合主義、テンプレってやつか。ありがたいけど。

「さっそく使ってみるよ」

（そうじゃな。起動方法は『ルート・イン』じゃ）

「『ルート・イン』！」

風景が変わる。研究室のようなところに入る。

（端末に触れ。目の前の画面に手をあててるのじゃ）

これか？

手をあててみる。

《マスターを承認します。》

無機質な女性の声が聞こえる。

《マスターの名前を入力してください》

「高坂《こうさか》蓮」

《承認しました。よろしくお願いします、マスター蓮。次に私の名前を入力してください》

こいつの名前か？AIって感じだから

「よし、お前の名前は『アイ』だ」

《了解しました、マスター蓮。》

さてここから出るにはどうしたらいいか。

（ここから出るには『ルート・アウト』で出られるぞ）

まだいたのか。いや見てたのか。ほんとに助かるな。

「『ルート・アウト』！」

風景がまた変わった。

目の前には葵の顔がドアップで現れた。

「／／／ 葵。近いぞ」

「／／／／／ ごめん」

真っ赤になっちゃって、俺もだけど。

「ってか昔の葵そのままだな？」

「蓮もそんな感じだよ」

お互い4歳児になっちゃったからな。

「で、どうした？ 何か用があるんじゃないのか？」

「何って、顔見せだよ。お互いどうなってるのか知りたいし本当に離ればなれになってないか気になって」

「そっか優奈と幸也もいたのか？」

「うん。みんな同じ家だね」

孤児院だったな。設定だと俺たちは同じ日に捨てられてこの院長先生に拾われたのか。

「俺たち以外に孤児はいないのか？」

「結構前に一番上が出ていたらしいよ。記憶によると」

俺たち4人と院長先生か物語にかかわってか。

「それでね。ご飯だよ」

みんな待ってるよ。と葵がせかす。

「すぐ行くよ」

そうして新しい人生が始まる。

） 蓮 side out （

第1話 く状況確認と能力を使うためにくその1（後書き）

次回も能力を使うために・・・です

原作まではもう少しかかるかな。

第2話 能力把握 その2 (前書き)

今回はご都合主義満載です。

・・・案外それほどでもないかも。

第2話 能力把握 その2

蓮 side

朝食を終えみんなで俺の部屋に集まる。

「さて状況確認。するから俺につかまって」

「ん？なんで蓮につかまるんだ？」

「神様に研究室をもらったからそこでしょうと思う。
能力もそこで使うといいと思うよ」

「いいもんもらってんだな」

そう言ってみんなが俺につかまる。

「コホン。では、『ルート・イン』！」

蓮 side out

幸也 side

蓮がキーワードを言うと風景が変わった。
研究室・・・か？

「神様によるとこの世界では外と時間の流れが違うらしい」

おま・・それネギまじゃねえか

「アイ聞こえてるんだろ？」

アイ？なんだそれは？

「蓮。アイって何？」

葵も聞いてくる。優奈も不思議そうだ。

「アイはこの世界の管理人みたいなものだ」

《お呼びでしょうか、マスター蓮》

おお。インテリジェントデバイスのAIみたいなもんか。

葵も納得がいったようだ。見てたんだけか？

優奈は普通に驚いてるみたいだけど。

「おお。アイちゃんは人工頭脳なのかな？」

天才か！？優奈はアニメとか見ないはずなのにもう理解してるのか？

《その通りです。》

「それで、訓練室はあるか？なるべく頑丈なやつ」

《はい、ここから転送しますがよろしいですか？》

「ああ、頼む」

かしこまりました、とアイが言う。

足元から魔法陣みたいなものが現れ光が俺たちを包む。

＼ 幸也 side out 〵

＼ 葵 side 〵

光に包まれたと思ったら今度は草原にいた。

幸也は水を得た魚みたいに生き生きしてる。

「さっそく能力使おうぜ」

私は転移系だからどうするんだろ？

思い描けばいいのかな？

「じゃあ俺から行くぜ。『トレースオン』！！」

幸也の手に剣が現れた。

・・・いやフォークか。

「へたれ」

ぐさ！擬音語が聞こえてくるみたいだ。

つい声に出ちゃったみたい。

「ち・・違うんだちょっとためしに「失敗するかもしれないから簡単のをだしたんだよな」

違うんだあああああ

幸也が走ってどこかに行ってしまう。

相変わらず蓮は幸也いじりがうまい。

「やりすぎじゃないの？蓮」

優奈が心配して言うが説得力がないちよつとにやけてるよ。

「幸也だからな。あと6分でケロッと戻ってくるだろ」

リアルな数字だ。ちなみに蓮がこう言うのと外れたことがない。

「さて優奈の能力は今発動できないが、葵。お前ならできるだろ」

ううん。どうやってやるのかな？

「神様にやり方のメモもらったからこれ見ろよ」

そんなのあるんだったら早く見せてよ。

すまん、すまん、と蓮は言うが絶対に悪いと思ってない。
そういう顔だ。とにかくメモ見てみるかな。

＼ 葵 side out 〵

＼ 蓮 said 〵

あれから6分で幸也が戻ってきた。

優奈の能力か。幸也と組手でもやるか？

「優奈の能力は願えばいいらしい」

「願う？」

「そう。この人に元氣になってほしいって願うだけ。本気で思はないといけないけど」

「意外と簡単だね。もっと難しいと思った」

「回復魔法ってそんなもんじゃないのか？小説やゲームだと高等技術にあたるはずだけど
回復ってやっぱり願いだと思うんだ」

「けどまだ使うことないよね。誰もけがしていないし」

痛いのはやだけど。

「幸也、フォーク貸して」

「ん？いいぞ何に使うんだ？」

フォークを受け取ってそのまま自分の掌におもいきり突き刺すザシュ。いやな音が響く。

「っ！」

めちやくちや痛い。

「！何してるの！？」

優奈はかなりびっくりしてるが
これも優奈の能力を見るためだ。

「ゆう・・・な、能力使って治してくれ」

ちよっと躊躇したようだがすぐに祈るように手をくんで、

「おねがい治って！」

俺の手に温かい光が溢れたと思うと傷口が完全にふさがった。

「ありがと、優奈」

優奈が泣きそうな顔をしていたので頭を撫でてやる。

「あ／＼／」

「ごめんな、優奈の能力を発動させてコツを掴ませてやりたかったんだ」

ふう結構痛かったが回復の瞬間はかなり気持ちよかったな。

これ、怪我がなくても体全体をリフレッシュできるんじゃないか？

「馬鹿野郎が、心配させやがって」

幸也にも悪いことをしたな。

幸也の能力で傷つけたんだから。

「まあ説教は後ろの方にまかせるけどな」

死ぬなよ、と幸也が目で言ってくる。

振り向くと黒いオーラを出した般若いや生ぬるいな直感が告げてる。
あの神様を超えていると。

この日また優奈の能力の世話になった。

蓮 side out

第2話 能力把握 その2 (後書き)

次回はそれから少し経たせます。

神を超えた葵の威圧

その力は魔王か夜叉かそれとも

第3話　く主人公との出会い、いざ翠屋へく（前書き）

原作まであと少しにさしかかろうかな

第3話 〈主人公との出会い、いざ翠屋へ〉

蓮 side

転生して1年が経った。まあ充実はしていた。

この体はまだ5歳児遠くへ行こうなんて思えない。

知識を使ってアイとこっそりデバイスを作っていた。

原作になったら幸也に渡そうと思う。

デバイスなしで魔法を使ったら。きっと実験動物だ。

そうならないといいな。

そうそう、翠屋というところに行ってみた葵と優奈が公園に行くと高町なのはという女の子が1人でさびしそうにしてたから遊んだ。

そしたら翠屋に招待されたからって、幸也はあのイベントかあとうるさかったが。

というわけで俺たちは現在翠屋の目の前にいる。

「ここが主人公の家か？」

「ここが魔窟か」

幸也お前かなり失礼なことを言ってるぞ。

「入ろうか」

優奈は甘いものが好きだからな

「いいか忘れるなよ俺たちは5歳児なんだからな」

店に入ると女性が出てきた、かなり若い。バイトさんかな？

「いらっしゃいませ。4名様なのかな？」

こんな子供にも敬語を使うのか。さすが従業員尊敬する。

葵が代表して言う。

「私、向日《ひゅうが》葵っていいです。なのはちゃんいますか？」

店員さんが驚いた顔をする。

「あなたが葵ちゃんね。なのはから聞いているわ。

私は高町桃子。なのはのお母さんよ」

お母さん！？若すぎだろ。

「なのはちゃんのお母さんでしたか。私は黒羽《くろばね》優奈です。

葵は前世と同じ日向の苗字だ。合わせるとヒマワリなんだよね。優奈も前世と同じ苗字だけど、読み方が違った。くろばだったのだから。

「後ろの男の子は・・・」

そうって俺と幸也を見る。

「俺は井口幸也です」

幸也は前世と全く違った。前世は佐藤だったな。

「僕は高坂蓮です」

俺は一応使い分けている。

やっぱ子供のうちから俺はだめだと思っただ。

「そう。なのはを今呼ぶから、カウンター席で待っててね」

そういつて桃子さんは店の奥に行ってしまった。

しばらくして、なのはちゃんがやってきた。

「ごめんね。おまたせ」

けっこうかわいいな。前世の目線で見ると上の上って言うだろう、幸也なら。

「あおいちゃん、ゆうなちゃん。そっちのふたりは？」

なのはちゃんが俺たち二人を見て言う。

俺たちも自己紹介をした。

友達が増えるのがうれしいんだろう。

「うん。うん。れんくんにこうやくんだね。よろしく」

「ケーキ食べに来たんだよ」

優奈。もう我慢できないのか。

「おかあさん、おいしいケーキみんなにだしてね？」

なのはちゃんも張り切ってる

「はいはい」

桃子さんもなのはちゃんに友達ができて、楽しそうにしてくれてうれしんだろう。

幸也が言うにはこの頃なのはちゃんのお父さんが事故で入院して一人ぼっち遊んでいたんだが、葵や優奈と出会って、さみしいことを家族に打ち明けてくれたんだろう。

幸也がなのはを攻略するためにあいつらより先に声をかけるつもりだったようだが。

邪心はだめだったようだな。

＼ 蓮 side out ｝

＼ 桃子 side ｝

今日はなのはの友達が店に来るって嬉しそうに言っていた。

士郎さんが事故で入院してから美由紀も恭也もなのはにかまっていられず

さびしい思いをさせてしまった。

あの日なのはが決意したような目で私と美由紀に言ったことはまだ頭の中に残っている。

『さみしいよ。もうひとりはいやだよ。』

その瞬間私たちはなのはに抱き着いていた。なのはにさびしい思いをさせてはいけない士郎さんが戻ってくるまでこの店を守ってなのはと一緒に笑顔でむかえるから。

桃子
side
out

第3話　く主人公との出会い、いざ翠屋へく（後書き）

次回は閑話

閑話　くなのはのその日く（前書き）

なのはと葵、優奈の出会った日です

閑話　　くなのはのその日く

きょうはあおいちゃんとゆうなちゃんがおみせにきてくれるひなの。おとうさんがけがおしてにゆういんして、おかあさんはおみせがいそがしくなって、

おにいちゃんはこわいかおをしてたかぞくをまもるんだっていったの。

おねえちゃんもおかあさんのてつだいでいそがしいんだって。

ひとりになっちゃった。すぐくさみしかったの。

でもさみしいっていつちゃったらめいわくかけちゃうからいわないの。

でも公園で遊んでいたらなみだがでてきてひとりでないていたの

「う、ひぐっ、さみしいよ」

「どうして泣いているの？」

おんなのこがふたりこっちにやってきた。

あわててなみだをふこうとするがとまらなかったの。

「あれ？とまらないよ」

おんなのこのうちひとりがわたしのあたまをなでてくれたの。

「あっ」

「泣きたい時にはね泣いてもいいんだよ」

わたしはそれをきいたときとめようとするのをやめた

「う、うわーん」

おおごえでないた。よしよしってなでてくれた。

もうひとりのこもねでてくれた。

わたしがじじょうをはなすと

「お母さんに言うというよ自分の本当の気持ちを」

「でも・・・」

もしかしたらわがままなこっっておこられるかも。

「そんなことないよきつと大丈夫。だからね」

おんなのこがウィンクする。

「友達になろうよ、私は優奈だよ」

「私は葵よ」

ともだちができたそれもふたりいっぺんに。

「あなたのお名前は？」

ゆうなちゃんがきいてくる。

「わ、わたしはなのは。たかまちなのは」

「なのはちゃんだね。今日はもう遅いから明日またこの公園で遊ぼうね」

わたしはとってもうれしくなったの。
またあしたもあえる。あそべる。

「じゃあねなのはちゃん。またあした」

「うん。またあした、ゆうなちゃん、あおいちゃん」

そういつてわたしはいえにかえったの。

おうちにかえるとおかあさんとおねえちゃんがいたの。
わたしはいうことにしたの。

「おかあさん」

「なに？なのは。」

なみだがでてる。

「さみしいよ。もうひとりはやだよ」

おかあさんはわたしをだきしめてくれた。
おねえちゃんもだきしめてくれたの。

「ごめんね。ごめんね。」

おかあさんとおねえちゃんはないてあやまってくれたの。
とってのうれしいちにちだったの。

閑話　くなのはのその日く（後書き）

原作まであとすこしです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3887ba/>

転生して目指すはサポート役

2012年1月10日12時56分発行